第二部　「環境保全への取り組み」

～　嘉瀬川ダム工事事務所の取り組み　～

はじめに

第二部では、「嘉瀬川ダム環境検討委員会」のご指導を受けながら嘉瀬川ダムの環境影響についてダム事業者として検討した内容を「環境保全への取り組み」として、とりまとめました。

具体的には、「地域の思いを生かした取り組み」について、調査と予測を行い、ダム事業者としての今後の取り組み姿勢を明らかにしました。また、「生物の多様性」、「水環境」及び「地域社会環境」について、調査と予測を行い、ダム事業者としての環境保全への取り組み姿勢と具体的な方策を明らかにしました。

1．嘉瀬川ダム建設事業の目的及び内容

1.1 嘉瀬川の概要

嘉瀬川は、佐賀県の中央部からやや東部に位置し、その源を佐賀県神埼郡三瀬村の脊振山系に発し、山間部を南流し、途中、神水川、天河川、名尾川と合流し、多布施川を分派し、さらに下流で祇園川をあわせて佐賀平野を貫流し、有明海に注ぎます。流域面積は約 368㎢、幹川流路延長は約 57㎞ の一級河川であり、流域内人口は約 13 万人(平成 15 年 3 月現在)です。

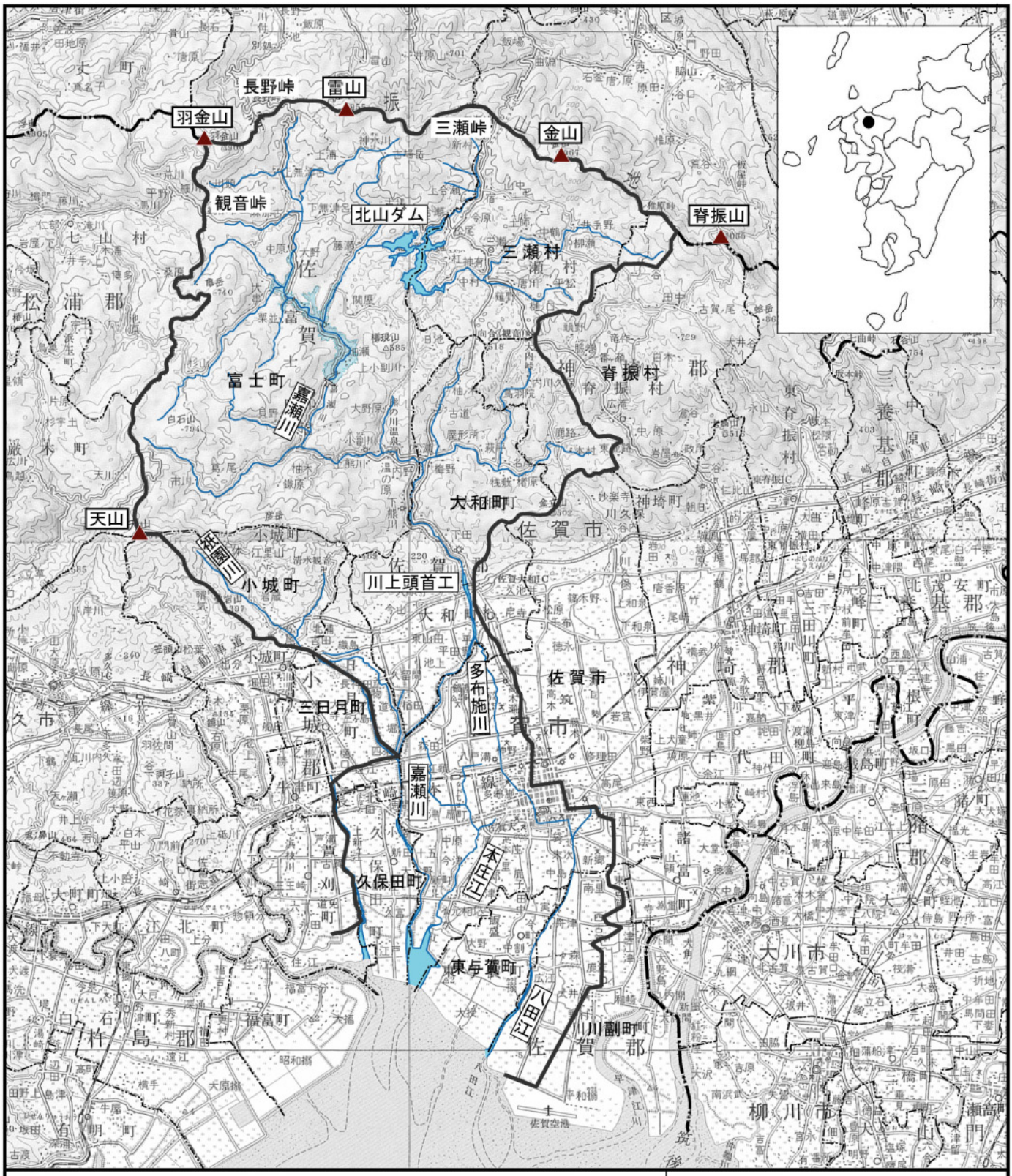
嘉瀬川流域は、西九州内陸型の気候を示し、降水量は梅雨期及び台風期に多く、地域的には上流部で多く、下流部で比較的少なく、地域差が大きいという特徴があります。近年では台風期よりも梅雨期の豪雨により災害が多く発生しています。

嘉瀬川流域の年平均降水量は、2,417㎜(平成 2 年～13 年)、年平均気温は 16.1℃です。

嘉瀬川の水利用は古くから行われ、かんがい用水、水道用水の水源、発電等に利用されています。特に下流部は広大な耕地を有し、佐賀地方の穀倉地帯となっています。嘉瀬川が貫流する佐賀平野は、筑後川、嘉瀬川等による土砂の搬入、有明海の海退等により形成された沖積平野で、表層部には有明粘土層と呼ばれる有機質が多く、含水率の高い極めて軟弱な層が 10m～30m の厚さで分布しているため、地下水採取に伴う地下水位の低下による地盤沈下が生じ易い地域です。また、この地域は地理的に水源が乏しく、平野部の各河川は感潮域がその中流域まで達し、水源としてほとんど利用できませんので、従来、地下水の利用が盛んでした。昭和 49 年 7 月の佐賀県公害防止条例による地下水採取規制以降、佐賀平野の嘉瀬川流域では、地下水採取量が大幅に減少し、そして、昭和 60 年 4 月に閣議決定された筑後・佐賀平野地盤沈下防止等対策要綱によりさらに地下水採取量が減少しました。そのため、地下水採取規制以降、地下水位が上昇する傾向にあり、地盤沈下も沈静化の方向にあります。

流域の産業は、上流部は林業としてスギ、ヒノキ等の計画造林、中流部は農業としてレタス、トマト、みかん等の栽培、林業としてスギ、ヒノキ等の計画造林を行っています。下流部は佐賀市を中心に商業、サービス業が主であり、水産業としてノリ、貝類の養殖、農業として稲作が盛んです。

流域の観光は、北山ダム付近と川上頭首工付近が県立自然公園区域に指定されており、四季を通じて訪れる人も多い場所です。また、嘉瀬川沿いには「古湯温泉」、「熊の川温泉」及び「川上峡温泉」があり、近隣住民の保養地として親しまれています。



凡　例

：ダム堤体

：貯水予定区域

：流域界

：県界

：市町村界

：河川・湖沼

1:200,000

0　4　8km

図1.1-1
嘉瀬川流域概要図